

春燈

3 月号

March 2017



主宰の句

安立公彦

淡彩に暮れゆく空や山眠る

幼児に語る童話や窓の雪

老々の隣家音なく冬深し

初夢のいつか腕組みしてをりぬ

寒星のひとつは孝村仏なるや



安住敦の句

てんと虫一兵われの死なざりし

『古曆』昭和二十年

師は千葉上総湊の「対戦車特攻隊」と名付けられた部隊に一兵として属していた。其処で終戦の詔勅をきいた。爆弾を背負い匍匐前進し敵戦車に躍り込む、必死の訓練はもう無い。万感の思いが込み上げ溢れる涙はとめどなく頬を伝わり流れた。目前を天道虫が横切った。助かった命の未来を予測するかの様な細いが輝かしい線を残して。師三十八才の句。

片桐てい女

安住敦の句

水仙を捨てたる雪が少し凹む

『午前午後』昭和四十四年

一読鮮明な句である。まず類想句がない。今迄、水仙を捨てると言う句に出合つたことが無い。それも雪の上にある。水仙と雪を詠んで新しい。楚々とした水仙と清らかな雪の景。そこへ「少し凹む」と言い切り突き放している。此の事が鑑賞者の心をゆさぶり、一気に美の世界へと誘う。それは一幅の絵画か。それとも無言劇か。またひとつ俳句の地平が広がった一句である。

沼田桂子

燈下集

○ 陳 妹 蓉

春聯の揮毫に並ぶ列の中
筆太の福の一ト文字春聯書く
サークルに小犬を放つ冬日向
宝くじはづれし苦笑年送る
乳を呑む子豚ずらりと冬うらら

○ 井 上 正 子

若き日の自画像の煤払ひけり
初春や赤絵の皿に料理盛る
願ひ事かつて破魔矢にかけし夢
結局はカレーに決まる三日かな
口で描く絵のやさしさや福寿草

○ 三 代 川 玲 子

散り敷くも残るもいちやう明りかな
冬夕焼すでに上げたる星一ツ
夫なしの気まま一人の年用意

数へ日の家居ひと日を無駄使ひ

初東雲家並はいまだ夜の底



○ 呉 文 宗

素直心に棄つるものなき煤払

極月や母似の妹の語り口

箱マッチ抛ればゴツホ冬の虹

行く年や小康の身に足らふなり

宇治の冬式部をば凍て跣まさむ

○ 豊谷青峰

カルデラの阿蘇の枯野や馬放つ

噴煙は北へ北へと雲凍つる

草千里馬糞も白き寒さかな

一村をつつむ湯煙干大根

寒月や洞窟風呂のランプの灯

○ 高埜良子

寄鍋や聴き役もはら箸つかひ

数へ日の夢買ふをみな籤売場

火の用心拍子木のあと童声

初電話恙なき声国訛

賀状享く太字の文字の歳女

○ 吉川隆

葱と傘立てにかけてある勝手口

義士の日や並ぶ歌舞伎の一幕見

山の端の夕日柚子湯に及びけり

旅先の入れて貰ふや焚火の輪

熱爛や酔はずば読めぬ母の文

○ 本田保

何事なく冬めく雨となりにけり

いつかまたひとりぼつちの寒さかな

首つたけの人のマフラー編んでをり

冬来る一人へり又一人へり

いつの間に冬めく雨となりしかな

○ 瀬戸峰子

よく売れて駅舎明るし焼諸屋

暮れそむる歌子の歌碑に六花

冬北斗社の杜へ柄をのばす

寒禽の声溢れおる神の森

まのあたり寒林透きて夕茜

○ 棗怜子

雪交ぜや外地赴任の子を送る

今更に気負ふ事なし年用意

有馬記念逝く年の憂さ流しけり

ビル狭間初日に映ゆる遠き富士

ほつとして重箱磨く七日かな

春燈賞（抄） 25句 自選

小山 繁子

繭玉のゆれを離さぬ太柱

還暦の立志やさらに初不動

音高くゆたかに郷の雪解川

芽柳の薄暮ゆれつぐ川面かな

春日傘身をあましゆく通ひ路

山笑ふ郷に光と人の声

こころして父想ふ日の新茶かな

夏を呼ぶ髪なびかせて佇つホーム

ポストまで梅雨の湿りの文をもて

回廊は風の抜け道梅雨の蝶

格付けと無縁のくらし燕の子

羅にときめく口々のすでに過去

ラムネ飲む忘れたきこと忘れむと

短夜や消灯までのもの想ひ

島の影島に重ぬる晩夏かな

新涼や漁師訛の魚市場

秋澄むや猫も耳かす遠汽笛

赤い靴履いて誰待つ桐は実に

海境へ秋日曳きゆく貨物船

畳なはる波のさきざき秋夕焼

恙なく一ト日の芙蓉閉ぢにけり

まなざしの羅漢父似や石露明り

あやとりのむかしにもどる五指十指

みちのくの残りし冬の紅葉かな

瞬かず野末の黙の枯木屋

当月集

安立 公彦選



○ 小島昭夫

嘶きのやすらかなるや大旦那

灯のひとつ独身寮の二日かな

タツクルのラガーの眼豹となり

上水の潺々として日脚伸ば

理屈ぼく抒情語るな春近し

○ 中嶋昌子

焚火してより人の輪の親しけれ

佐助のことしよく咲き夫あらず

歳晩の賑はひの中にてひとり

縫ひ上げて吾子の二十歳の春着かな

大ぶりの古りし塗椀齋粥

○ 渡辺若菜

数へ日やあねさん被り解け易き

冬木立明るくなりし母の部屋

大盛りのきつねうどんや雪催

公園の錆びし鉄棒寒の雨

手ごたへの無き返信や石露の花

○ 神田恵琳

極月の力あまさず第九かな

探海の風に歩幅のゆるみをり

その小花神の色なり猫柳

少年のはにかみのさま冬木の芽

小春日や無念無想に遊ぶ幸

○ 小山繁子

手のひらにのるだけの運冬林檎

せり声の尖る師走の市場かな

笹子鳴く山肌めぐる日を余し

寒も底櫛夕日に佇ちにけり

復興の鳥居に淑気およびけり

春燈の句

安立 公彦選

案じつつ賀状の返事待つ夕べ

千葉 田村 初枝

風揚や子の手を離す父の顔

日暮まで賑はふ地蔵年の暮
年毎に減る年賀状書きにけり

東京 池田 節

恙なき辛をもたらず雑煮かな

シクラメンの花に酔ひたる誕生日
林檎むき里のはらから思ひけり

整体の指の温さや小正月

春の夢あの世よりひと逢ひに来て

除夜の鐘余韻は星の辺に向かふ

東京 布村 松景

亡き母の声は平仮名冬障子

窓ごしに空見る日々や春愁

東京 原田 小芝

片足を雪に埋めて道譲る

春愁や髪を伸ばして老いゆくも

書き出しは開き始むる冬の梅

今日も又目刺を焼いて独りかな

踏台で吊す新巻奉書巻き

千葉 鶴岡 紀代

初東風や真砂女の句碑は波返す

真つ直ぐに友の声来る枯野かな

京都 曾根 京子

初結や母子で同じ衿黒子

公園の空つぼの椅子冬初
隙見せぬ友の背ラや冬日差

春着縫ふ紅絹の針山ふつくらと

風に乗り渡り来るなり除夜の鐘

冬雲の三筋たなびく今朝の空

埼玉 原田たづゑ

友垣の厚き誼や年送る

縄文の貝殻にさす初日かな

茨城 山崎 刀水

四方拝清めし庭に下り立ちて

信号待ちの長き踏切初筑波
会ふことのなき旧友の年賀状

思ひ出を手繰る心や去年今年

出初式ホース干さるる火の見かな



余言

安立公彦

冬夕焼こなから酒に酔ひしかな

松橋 利雄

「こなから酒」は「小半酒」。「半ら」はおよそ半分の意。即ち、二号五句の酒。また少量の酒の意とも言う。

作者は股関節の治療のため、長い闘病生活にあったが、昨年効あつて退院、新年大会にも出席された。慶ばしいことである。この句、窓外の冬夕焼を見ながら、久しぶりに酌む酒に早くも酔う身を、感謝の思いで振り返っている様子がよく表現されている。「こなから酒」はわずかな酒と解するが、その雅な言葉がよく一句の中心となり、作者の思いを受けとめている。

十二月八日蒼穹に鳶高舞へり

鷹崎由未子

十二月八日は第二次世界大戦の始まった日、所謂「開戦日」だが、これは手持の歳時記には記載されていない。終戦日という結果がある以上、開戦日もあつて然るべきだが、

終戦日と異なり、解釈の仕方が分かれるため、季語としてはまだ熟していない言葉だからだろう。

ここに掲げた「十二月八日」には、多くの思いが集結している。季語としての内容を充分に満たしている。作者は青空に高舞う鳶を見つつ、その思いを反芻しているのだ。

道ならぬ恋に道なし近松忌

中野 英伴

忌日俳句を詠むということは、その故人に傾倒して初めて出来ること。〈近松忌しのび泣きもす女とは真砂女〉などは、わが来し方を近松の作品に置き変えている。また、〈近松忌契結んでしまひけり 櫻桃子〉も同じ。

掲出句。作者の近松への傾倒ぶりが良く分かる。「道ならぬ恋」とは道義に外れた恋。その行く末は情死、即ち、「道なし」。『心中重井筒』など近松の世話物を思い出すとともに、そのエピソードの一節を見るような句だ。

息白く遺影の視野に佇ちにけり

近藤 牧男

昨年十一月十五日の、和田孝村さんの告別式での作品。告別式には、東京から作者と私が出席した。

この句、前書はないが、一句を通して故人への畏敬の思いが良く出ている。「遺影の視野」は、故人の眠る柩の域

である。この句を見ると、その時の光景が浮かんで来る。今月号にも孝村さんへの悼句は多かった。私たちは惜しい人を失った。

小春日や神鶏あそぶ神楽殿

和田 幸江

神楽殿のある境内の広い神社だろう。小春日和のなか、禰宜の飼う鶏がその神楽殿の回りで遊んでいる。

しかしこの句は、そういう解釈を越えた高い境地の句となっている。それはこの句の表現の良さから来ているものであり、また言葉の選択の良さも加味されている。「神鶏あそぶ神楽殿」の表現は良い。配するに「小春日」の季語がその景を良く支えている。

遠山へ冬日は色を尽くしけり

太田 慶子

「写生」が俳句に与える影響は、深く、静かに、そして確実に一句の表現を高める。正岡子規以前にも、写生の句はあったが、俳句、短歌に「写生」という具体的な言葉をもたらした子規の功績は大きい。

この句、冬の短い午後の日照を、「色を尽くしけり」と写生した表現がいい。「尽くし」に冬の弱々しい日差しが良く出ている。「遠山」という使い古された言葉も、一句の背景となつて冬日をいざなう。「遠山へ」の「へ」とい

う助詞一字の効果も勿論のことである。

風花や川と分かれて道つづく

太田佳代子

この句、中七の「分かれて」は、「別れて」とすることも出来る。「別れて」には作者の感情が入り、印象は深まるが、川の内容は薄れる。「分かれて」とすると、蛇行する川の様子がありありと浮かぶ。作者がこの中七を選んだのは、「道つづく」に作者の思いが籠められているからだ。「道」は川に沿う道であるとともに、作者の「人としての道」でもある。「別れて」という感情は作者の意図にそぐわない。作者は四十四歳。現在の燈下集作家では最も若い。大成への道を期している。

熱爛や酔はずば読めぬ母の文

吉川 隆

この句を読む人は、その人それぞれの思いで読むことだろう。作者を知らない人にとり、鑑賞はさまざまだ。

その一つ。この句の主人公の母はすでに他界している。その主人公は、はるかむかし、若い頃に届いた母の手紙を今も大事に持っている。その手紙は、若さ故の誰もが通る寄り道を、切々と案じる母の思いに充ちている。

歳末のひと曰、主人公は久しぶりに母の手紙を取り出した。若い頃の思い出がよぎる。酔わずには読めない。十七文字の呼ぶ物語の世界は深い。そして母は有難い。